

官佛蘭西
法律書
訴訟法

東京圖書館	
新門	一四一
部	一一
架	二
號	四九六

CF2
3
07

共八本

明治六年四月四日

權大内史箕作麟祥譯

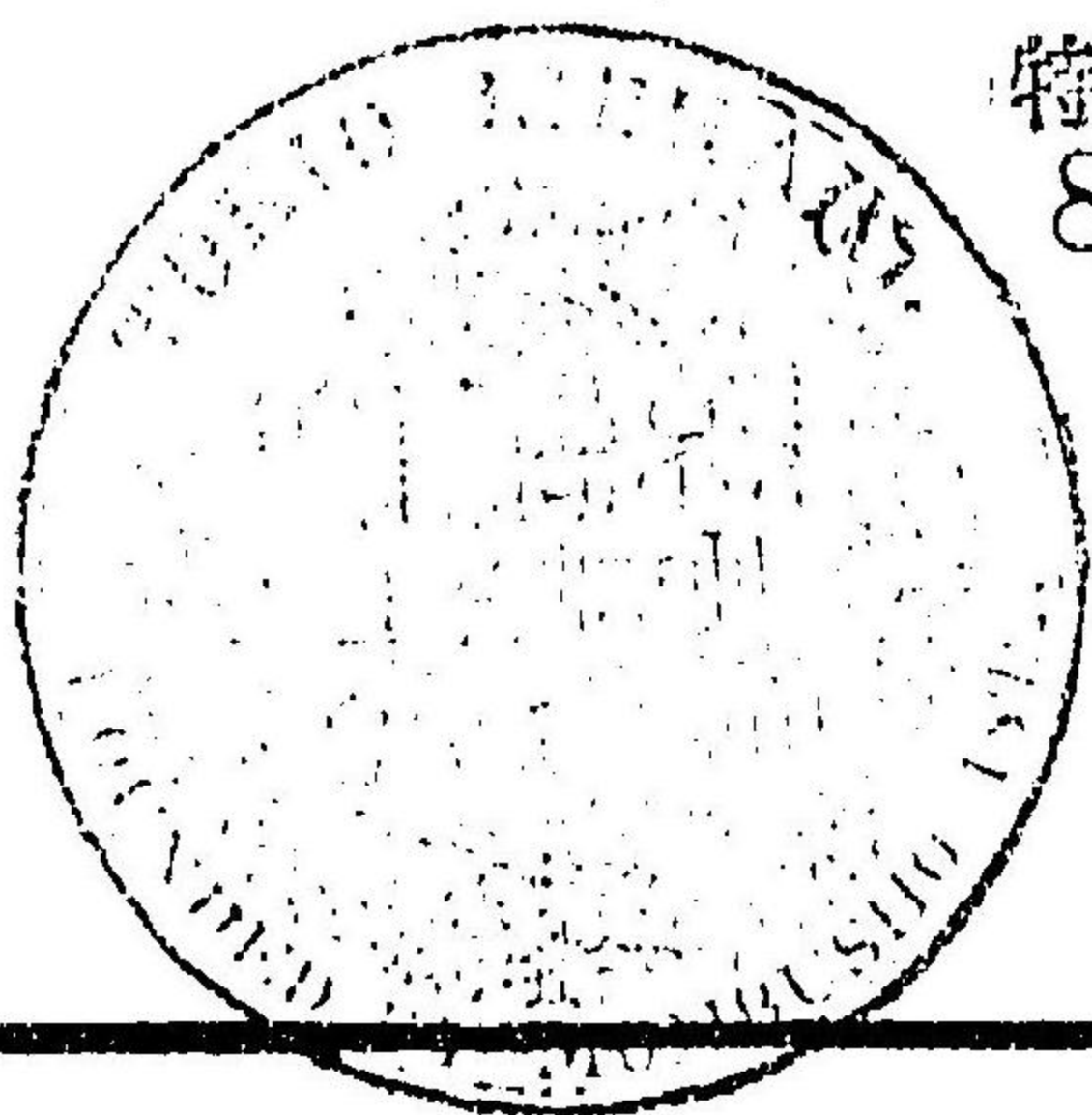
第一卷

佛蘭西
法律書
訴訟法

文部省

CFD
3
07

特56
84



佛蘭西
法律書
訴訟法第一

權大内史箕作麟祥 譯

明治九年文部省交付

○上篇 裁判所ニ於テノ訴訟

第一卷

治安裁判所チヤンサイサイパン千八百六十六年四月十

四日決定同月廿四日布告

○第一章 呼出ノ事

第一條 治安裁判所へノ呼出狀ニハ年月日及

ト原告人ノ姓名、住所、職業、使吏ノ姓名、住居、授

佛蘭西
訴訟法

上篇第一卷第一章

文部省

明治六年四月廿四日

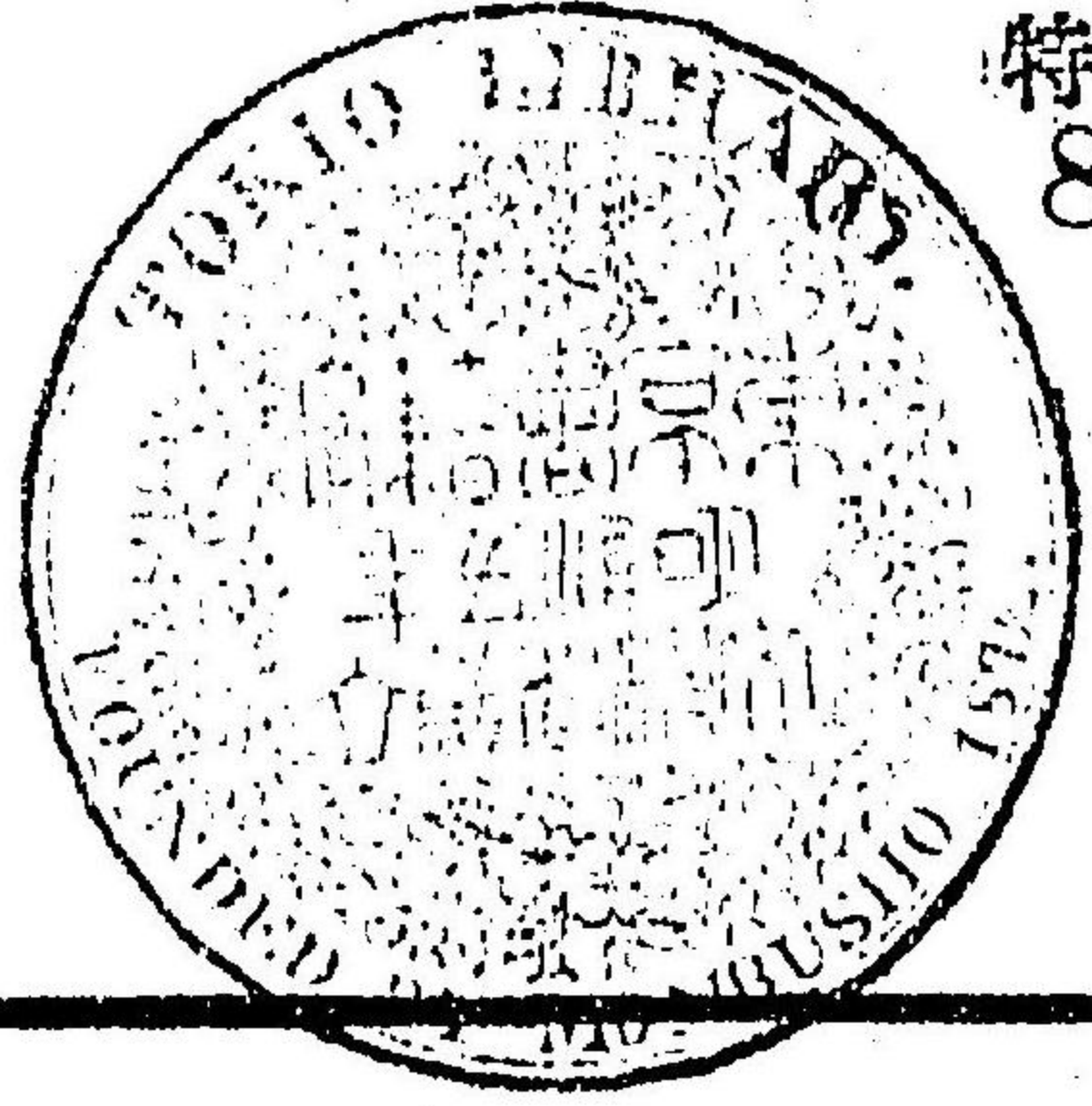
權大内史箕作麟祥譯

第一卷

佛蘭西
法律書
訴訟法

文部省

特56
84
CF2
3
07



佛蘭西
法律書
訴訟法第一

明治九年文部省交付

權大内史箕作麟祥 譯

○上篇 裁判所ニ於テノ訴訟

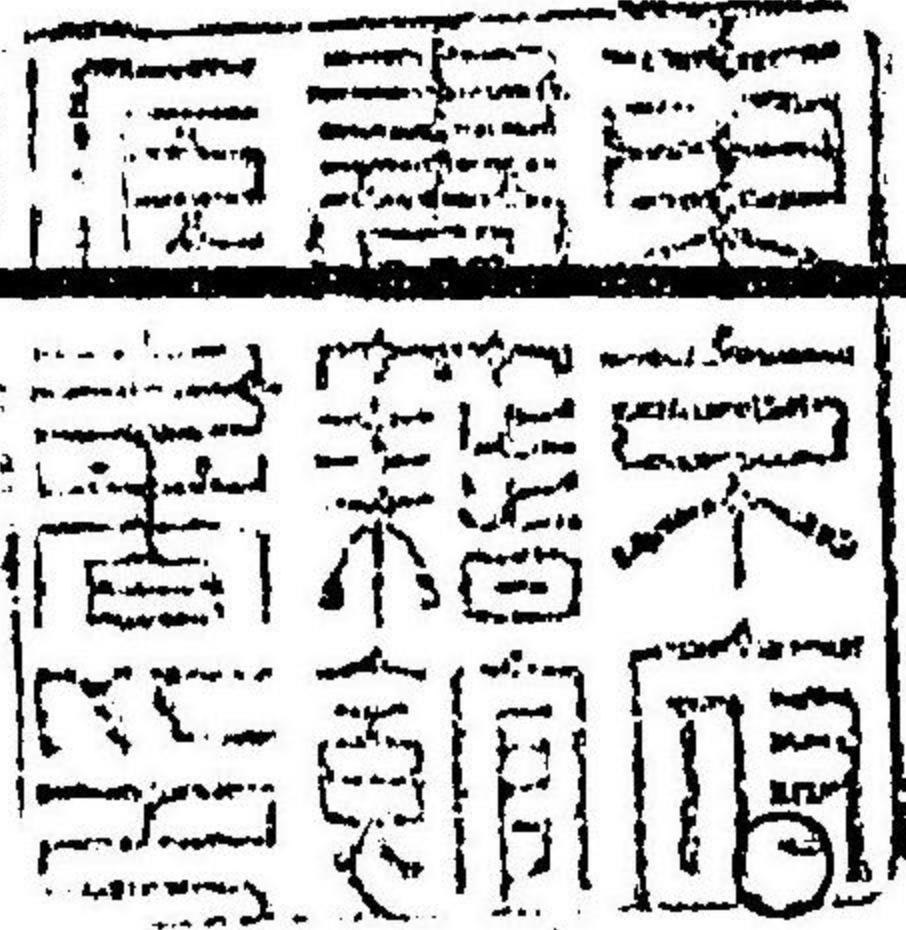
第一卷 治安裁判所千八百六十六年四月十

四日決定同月廿四日布告

○第一章 呼出ノ事

第一條 治安裁判所へノ呼出狀ニハ年月日及

ト原告人ノ姓名住所職業使吏ノ姓名住居授



佛蘭西
訴訟法

上篇第一卷第一章

文部省

任狀、被告人ノ姓名、住所ヲ記シ且訴訟ノ趣意及ヒ訴訟ヲ為スノ憑據ト之ヲ審判ス可キ裁判所並ニ裁判所ニ出席ス可キ日刻トヲ記ス可シ

第二條 人權又ハ動産ノ事ニ付キ訴訟ヲ為ス時ハ被告人ヲ其住所ノ裁判所ノ裁判役ノ面前ニ呼出シ若シ被告人ノ住所知レサル時ハ其寄居スル場所ノ裁判所ノ裁判役ノ面前ニ之ヲ呼出ス可シ

第三條 左ノ件々ニ於テハ争ノ生レタル物件

所在ノ地ノ裁判所ノ裁判役ノ面前ニ被告人ヲ呼出ス可シ

第一 田野、果實、收納物ニ損害ヲ為シタルニ付テノ訴訟

第二 本年内ニ為シタル經界ヲ移易セシ事、土地、樹木、植籬、溝渠、及ヒ其他ノ繞圍物ヲ侵セシ事又ハ水路ニ營ミ設ケシ物件ニ管シタル事ニ付テノ訴訟及ヒ占有ノ權ニ付テノ訴訟

第三 借屋ノ修理ニ付テノ訴訟

第四 土地又ハ家屋ノ借主其借受ケタル
 土地又ハ家屋ノ利益ヲ得ル下能ハサル
 ニ付キ償ヲ求メテ貸主ノ之ヲ争ハサル
 時唯其分量ニ付テノ訴訟及ヒ土地又ハ
 家屋ノ貸主ヨリ其借主之ヲ損壞シタル
 ニ付キ為ス所ノ訴訟

第四條 呼出狀ハ被告人住所ノ治安裁判所ノ
 使吏之ヲ被告人ニ送達シ若シ其使吏ニ故障
 アル時ハ裁判役ノ特ニ任シタル者之ヲ送達
 シテ被告人ノ方ニ其書ノ寫ヲ留メ置ク可シ

若シ其住所ニ人ノアラサル時ハ其邑長又ハ
 其補佐人ノ方ニ其書ノ寫ヲ留メ置ク可シ但
 シ此等ノ官吏ハ謝金ヲ收ムルコトナク其正本
 ニ檢印ヲ為ス可シ

治安裁判所ノ使吏ハ其宗系ノ血屬ノ親其兄
 弟姉妹及ヒ同上ノ級ノ姻族ノ親原告人タル
 時其者ノ為メ呼出狀ヲ送達ス可カラス

第五條 呼出ヲ受クル被告人治安裁判所ヨリ
 三「ミリヤメートルノ距離内ニ住スル時ハ呼
 出狀ヲ送達シタル日ト裁判所ニ出席ス可キ

日トノ間ニ一日ヨリ少カラサル時間ヲ隔ツ可シ

若シ被告入其距離外ニ住スル時ハ三「ミリヤメートル」毎ニ一日ヲ増ス可シ

原告人此猶豫ノ時間ヲ隔ツ可キ規則ニ背キタル時被告人出席セサルニ於テハ裁判役被告

人ニ再ヒ呼出狀ヲ送達ス可キ「ヲ」原告人ニ言渡ス可シ但シ初メ呼出狀ヲ送達シタル

費用ハ原告人之ヲ擔當ス可シ
第六條 至急ノ場合ニ於テハ裁判役其猶豫ノ

定期ヲ減スル呼出狀ヲ原告人ニ與ヘ原告人其呼出狀ニ記シタル日刻ニ被告人ヲ呼出ス「ヲ」得可シ

第七條 原告被告雙方ノ者己レノ隨意ヲ以テ

治安裁判所ニ出席スル「ヲ」得可シ但シ此場合ニ於テ被告人ノ住所ノ地又ハ争ノ生シタル

物件所在ノ地ノ事ニ付キ其裁判所ノ裁判役雙方ノ者ノ為メ至當ノ裁判役ニ非サル時

ト雖モ法律上ノ許シ又ハ雙方ノ者ノ承諾ニ因リ其訴訟ニ付キ終審ノ裁判ヲ為シ又ハ始

審ノ裁判所ヲ為スヲ得可シ
雙方ヨリ其裁判ヲ願フ書面ハ雙方ノ者之ニ
姓名ヲ手署ス可シ若シ手署スルヲ能ハサル
時ハ其旨ヲ記ス可シ

○第二章 治安裁判所ノ聽訟及ヒ雙方
ノ者ノ出席

第八條 治安裁判所ノ裁判役ハ每週二次ヨリ
少カラサル聽訟ノ日ヲ定メ日曜日及ヒ祭日
ヲ問ハス午前午後共ニ裁判スルヲ得可シ
其裁判役ハ已レノ家ニテ訟ヲ聽クヲ得可

シ但シ衆人來聽ノ為メ其門扉ヲ開キ置ク可
シ

第九條 呼出狀ニテ定メタル日又ハ雙方互ニ
協議シタル日ニ至リ雙方ノ者自ラ出席シ又
ハ名代人ヲ出ス可シ但シ雙方互ニ辨論書ヲ
送達ス可カラス 第七十七條見合

第十條 雙方ノ者ハ裁判役ノ面前ニテ言語ヲ
慎ミ裁判所ニ對シテ不敬ナキヲニ注意ス可
シ若シ雙方ノ者過失アル時ハ裁判役先ツ其
過失ヲ責治シ再犯ノ時ハ十「フラン」ニ過キ

サル罰金ヲ言渡シテ且其言渡書ヲ貼附ス可
シ但シ其貼附ノ數ハ縣中ノ邑數ニ過ク可カ
ラス

第十一條 裁判役ヲ辱シメ又ハ甚シキ不敬ヲ
為シタル時ハ其旨ヲ調書ニ記シ三日ヨリ多
カラサル時間禁錮ヲ言渡ス可シ

第十二條 前二條ニ記シタル場合ニ於テノ裁
判言渡ハ假ニ之ヲ執行フ可シ

第十三條 雙方ノ者又ハ其名代人^互ニ相對シ
テ吟味ヲ受ク可シ○訴訟ハ直チニ之ヲ裁判

シ又ハ次ノ聽訟ノ日ニ之ヲ裁判ス可シ又裁
判役必要ナリト思量スル時ハ證書類ヲ出サ
シム可シ

第十四條 一方ノ者他ノ一方ノ者ノ證書ノ贋
造タルヲ訴ヘント欲シ又ハ之ヲ認メサル
旨ヲ述フル時ハ裁判役其旨ヲ書面ニ記シテ
之ヲ其者ニ與ヘ且其證書ニ姓名ニ代用スル
横線ヲ畫シ此事ヲ審判ス可キ裁判役ノ面前
ニテ訴訟ヲ為ス可キヲ言渡ス可シ

第十五條 本案ニ管スル預審ノ言渡<sup>第四百五
十二條見</sup>

合ヲ為シタル時ハ其日ヨリ四月ニ過キサル
 時間ニ其本案ノ確定ノ裁判ヲ為ス可シ其四
 月ノ期限後ハ其定期ヲ過セシニ因リ其訴訟
 ヲ取消ト為ス可シ若シ四月後ニ訴訟ノ本案
 ニ付キ裁判ヲ言渡シタル時ハ治安裁判所ニ
 テ終審ノ裁判ヲ為シ得可キ事件ト雖モ一方
 ノ者控訴ヲ為シテ其言渡ヲ取消ト為ス可
 得可シ
 若シ裁判役ノ過失ニ因リ同上ノ定期ヲ過
 シタル時ハ裁判役一方ノ者ニ其損失ヲ償フ

可シ

第十六條 治安裁判所ノ裁判言渡ハ其裁判所
 ノ使吏又ハ裁判役ヨリ特ニ任シタル者其裁
 判言渡書ヲ送達シタル日ヨリ三月内ニ非サ
 シハ控訴ヲ為ス可カラス
 第十七條 三百フランニ至ル迄ノ價高ニ付
 キ治安裁判所ノ裁判言渡ハ相手方控訴ヲ為
 スニ管セス其言渡ヲ得タル者假ニ之ヲ執行
 ヒ其執行ニ付キ保證人ヲ立ツルニ及ハス又
 其他ノ場合ニ於テハ治安裁判役其裁判ノ如

ク假ニ執行ヲ可キトテ言渡スヲ得可シト雖
モ其言渡ヲ得タル者ヨリ保證ヲ立ツ可シ

第十八條 裁判言渡ハ裁判所ノ書記官聽訟ノ
書類ノ簿冊ニ之ヲ記シ其訟ヲ聽キタル裁判
役及ヒ書記官之ニ姓名ヲ手署ス可シ

○第三章 一方ノ者抗傳シテ言渡シタ
ル裁判及ヒ其裁判ニ付キ故障ノ述
クル事

第十九條 呼出狀ニ記シタル日ニ至リ一方ノ
者出席セサル時ハ其者抗傳ノ儘ニテ其訴訟

ヲ裁判ス可シ但シ第五條第三項ノ場合ニ於
テハ其出席セサル者ヲ再ヒ呼出ス可シ

第二十條 抗傳シテ裁判ノ言渡ヲ受ケタル者
ハ治安裁判所ノ使吏又ハ特ニ任ヲ受ケタル
者ヨリ其言渡書ヲ受取リシ後三日内ニ其言
渡ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可シ
其故障ヲ述フル書ニハ之ヲ述フル者ノ憑據
トスル所ヲ簡略ニ記シ且其後ノ聽訟ノ日ニ
他ノ一方ノ者ヲ呼出ス可キ旨ヲ記ス可シ但
シ之ヲ呼出スニハ其定期ニ循フ可ク且其呼

出狀ニハ其出席ス可キ日刻ヲ記シ前ニ云ハ
ル如ク之ヲ送達ス可シ

第二十一條 治安裁判所ノ裁判役自カラ被告
人其訴訟ヲ知ラサルノ證ヲ得又ハ被告人ノ
親族隣人朋友ノ聽訟ノ時述ヘタル所ニ因リ
其被告人訴訟ヲ知ラサルノ證ヲ得タルニ於
テハ裁判役被告人ノ抗傳ノ儘ニテ裁判ヲ言
渡シタル時其者言渡ノ故障ヲ述フルニ相當
ナルト思量スル猶豫ノ期限ヲ定ムルヲ得
可シ又裁判役其職務ヲ以テ猶豫ノ期限ヲ許

スルナク又ハ之ヲ願フ者ナキ時ト雖モ抗傳
者失踪又ハ重病ニテ其訴訟ヲ知り得サルト
テ證スル時ハ猶豫ノ期限ヲ得テ裁判言渡ニ
付キ故障ヲ述フルヲ得可シ

第二十二條 裁判言渡ニ付キ故障ヲ述フル者
再ヒ出席ヲ為サスニテ裁判ヲ受ケタル時ハ
更ニ裁判言渡ニ付キ故障ヲ述フ可カラス

○第四章 財産占有ノ權ノ訴訟ノ裁判
第二十三條 財産占有ノ權ニ付テノ訴訟ハ一
年ヨリ少カラサル時間所有者ノ名義ヲ以テ

財産ヲ自カノ妨ナク占有シ又ハ名代人ヲレ
テ其財産ヲ妨ナク占有セシメタル者他人ヨ
リ其妨ヲ受ケタル後一年内ニ非レハ之ヲ為
スコトヲ許サス

第二十四條 被告人原告人ニ占有ノ權ナント
述ヘ又ハ其權ヲ妨ケタルトナント述フル時
裁判所ヨリ言渡シタル證人吟味ハ占有ノ權
ノミニ關係ス可ク所有ノ權ニ管ス可カラス
第二十五條 占有ノ權ニ付テノ訟ト所有ノ權
ニ付テノ訟ト共ニ同時ニ為ス可カラス

第二十六條 所有ノ權ノ訴訟ニ付テノ原告人
ハ占有ノ權ニ付テノ原告人トナルコトヲ得ス
第二十七條 占有ノ權ノ訴訟ニ付テノ被告人
ハ其訴訟ノ終リレ後ニ非レハ所有ノ權ニ付
テノ原告人トナルコトヲ得ス又其占有ノ權ノ
被告人負訴訟ノ時ハ其言渡サレシ如ク執行
ヲタル後ニ非レハ所有ノ權ニ付キ原告人ト
ナルコトヲ得ス
然レ克訴訟ノ者其負訴訟ノ者ヲレテ其言渡
ノ如ク執行ハレムルニ怠リレ時ハ裁判役其

負訴訟ノ者ヲシテ其言渡ノ如ク行ハシムル
猶豫ノ期限ヲ定メ其期限ノ後ハ負訴訟ノ者
所有ノ權ニ付テノ原告人トナルヲ許スヲ
得可レ

○第五章 確定ニ非サル裁判言渡及ヒ
其執行

第二十八條 確定ニ非サル裁判ヲ雙方ノ面前
ニテ言渡シタル時ハ其言渡書ヲ送達スルニ
及ハス ○其言渡ニテ雙方後ニ裁判所ニ出テ
又ハ他所ニ至テ親シク其面前ニテ行ノ可キ

所為ヲ命スル時ハ其言渡書ニ雙方ノ者後ニ
出席ス可キ日刻ヲ記ス可レ但シ其言渡書ヲ
讀上ケタルヲ以テ後ニ裁判所ニ出テ又ハ他
所ニ至ラシムルノ呼出狀ヲ送達シタルニ等
シキ効アリトス

第二十九條 裁判所ノ言渡ニ鑑定人ヲシテ為
サシム可キ所為ヲ命スル時ハ裁判役之ヲ願
フタル者ニ其鑑定人ヲ呼出ス可キ呼出狀ヲ
與フ可レ但シ其呼出狀ニハ其出ツ可キ場所
ト日刻トヲ記シ且其事柄其主意并ニ其事ヲ

為スヲ命スル言渡ノ旨モ亦記ス可シ
同上ノ言渡ニ證人吟味ヲ命スル時ハ其證人
ノ呼出狀ニ其言渡ノ日附及ヒ其出ツ可キ場
所并ニ日刻ヲ記ス可シ

第三十條 治安裁判所ノ裁判役争ノ生シタル
土地ヲ檢査シ又ハ證人ノ述フル所ヲ聽ク可
キ為メ其土地ニ至ル時ハ書記官ヲ同伴ス可
シ但シ其書記官ハ預審ノ裁判言渡ノ正本ヲ
携ヘ行ク可シ

第三十一條 確定ノ裁判言渡アリシ後ニ非シ

ハ本案ニ管セサル預審ノ裁判言渡ヲ控訴ス
可カラズ又其預審ノ裁判ノ控訴ハ確定ノ裁
判ノ控訴ト共ニ之ヲ為ス可シ

然レ預審ノ裁判言渡ノ如ク執行ヒ雙方ノ者
別段ノ約定ヲ為サスト雖モ控訴ヲ為ス可キ
權ノ阻害トナルコトナカル可シ

本案ニ管スル預審ノ裁判言渡ヲ控訴スルコ
トハ確定ノ裁判ヲ言渡ス可キ前ニ之ヲ為スコ
ト許ス

此場合ニ於テハ其預審ノ裁判言渡書ノ副本

ヲ相手方ニ送達ス可シ

○第六章 保證者ヲ呼出ス事

第三十二條 被告人初メテ裁判所ニ出席シタル日ニ保證人ヲ裁判所ニ呼出ス可キヲ願フタル時ハ裁判役其保證人ノ住所ノ距離ニ准シ相當ノ猶豫ヲ許ス可シ又保證人ニ送達スル呼出狀ハ簡略ニ其趣意ヲ記ス可シ但シ保證人ヲ呼出ス可キヲ命ニタル裁判言渡書ハ之ヲ保證人ニ送達スルニ及ハズ

第三十三條 被告人初メテ出席シタル時保證

人ヲ呼出ス可キヲ願ハサル時又ハ定期内ニ其呼出狀ヲ保證人ニ送達セサル時ハ直ニ訴訟ノ裁判ニ取掛ル可シ但シ後ニ至リ別ニ其保證人ヲ呼出ス可キ願ノ裁判ヲ為ス可シ

○第七章 證人吟味ノ事

第三十四條 雙方ノ述フル所相異ナリテ證人ヲ以テ之ヲ證スルヲ得可キ事件ナル時裁判役證人ヲ以テ之ヲ證センムルヲ有用ナリト思量スルニ於テハ其證ヲ立ツ可キヲ言渡シテ審カニ其目的ヲ定ム可シ

第三十五條 定リシ日ニ至リ證人出席ノ上其姓名、職業、年齡、住所ヲ述ヘタル後誠實ヲ述フ可キノ誓ヲ為シ且原告又ハ被告ノ血屬又ハ姻屬ノ親ナル時ハ其級ヲ述ヘ又其從僕ナル時ハ其旨ヲ述フ可シ

第三十六條 證人ハ原告被告雙方ノ者出席スルニ於テハ其雙方ノ面前ニテ各自ニ其證ヲ述フ可シ又一方ノ者證人ニ付キ故障ヲ述ヘントスル時ハ證人ノ證ヲ述フル前ニ其故障ノ書面ヲ出シ之ニ其姓名ヲ手署ス可シ若シ

姓名ヲ手署スルヲ知ラス又ハ之ヲ為シ得サル時ハ其旨ヲ記ス可シ○其證人ニ付キ故障ヲ述ル書ハ證人ノ既ニ證ヲ述ヘ始メタル後之ヲ出スヲ許サス但レ別段ノ證書アルニ因リ其故障ヲ述フ可キ道理アル時ハ格別ナリトス

第三十七條 雙方ノ者證人ノ證ヲ述フル間ハ辭ヲ參スルヲ得ヌ又裁判後ハ證人ノ證ヲ述ヘ終リシ後雙方ノ求メニ從ヒ又ハ己レノ職務ヲ以テ證人ニ相當ノ問糺ヲ為スヲ得

可レ

第三十八條 證人ノ述フル所ヲ解レ得可キ為
 ノ土地ヲ檢査スルノ有益ナル特殊ニ經界
 ノ移易及ヒ土地、樹木、植籬、溝渠、其他繞圍物、
 侵奪并ニ水路ニ營ミ設タル物件ニ付テノ訴
 訟ニ於テハ裁判役必要ナリト思量スル時自
 カラ其地ニ至テ證人ノ述フル所ヲ聽ク可キ
 トヲ言渡ス可レ

第三十九條 控訴ヲ為シ得可キ訴訟ニ付テハ
 裁判役ノ書記官證人ノ述フル所ヲ調書ニ記

レ其調書ニハ證人ノ姓名、年齢、職業、住所、誓詞
 ト其原告又ハ被告ノ血屬、姻族、親或ハ後僕
 ナリトノ申述并ニ其證人ニ付キ故障ヲ述ヘ
 タル事ヲ記ス可レ○其調書中各證人ニ管レ
 タル部分ヲ其證人ニ讀ミ聞カセ其證人ハ已
 レノ述ヘタル所ヲ記シタル部分ニ姓名ヲ手
 署ス可シ若シ其姓名ヲ手署スルコトヲ知ラス
 又ハ之ヲ為シ得サル時ハ其音ヲ記ス可シ
 且其調書ハ裁判役及ヒ書記官其姓名ヲ手署
 ス可レ○此事ヲ為シタル後即時ニ裁判ニ取

掛リ又ハ遅クトモ次ノ聽訟ノ日ニ其裁判ニ取掛ル可シ

第四十條 治安裁判所ニテ終審ノ裁判ヲ為レ得可キ訴訟ノ時ハ前條ニ記シタル調書ヲ記スルニ及ハス其裁判言渡書ニ證人ノ姓名年齢職業住所誓詞ト其原告又ハ被告ノ血屬又ハ姻族ノ親又ハ其從僕ナリトノ申述ト并ニ證人數人ノ述ハタル所ノ結局トヲ記ス可シ
○第八章 土地ノ檢査及ヒ評價
第四十一條 土地ノ景狀ヲ檢査ス可キト又ハ

不動産ニ付テノ償額ヲ計ル可キトアル時ハ治安裁判所ノ裁判役雙方ノ面前ニテ自カラ其他ヲ檢査ス可キトヲ言渡ス可シ

第四十二條 檢査又ハ評價ヲ為スニ裁判役ノ習知セサル鑒識ヲ要スル時ハ其裁判役鑒定人ト共ニ其地ヲ檢査シ鑒定人ヲレテ其意ヲ述ヘレム可キトヲ言渡ス可シ但レ其鑒定人ハ其言渡書ヲ以テ任ス可シ○其裁判役ハ其地ヲ去ルトナク直チニ其場所ニ於テ裁判スルトヲ得可シ○控訴ヲ為ストヲ得可キ訴訟

ニ付テハ書記官其検査ノ調書ヲ記ス可ク其調書ニハ鑑定人ノ述ヘタル誓詞モ亦之ヲ記ス可シ○其調書ニハ裁判役書記官鑑定人其姓名ヲ手署ス可シ若シ鑑定人其手署ヲ知ラズ又ハ為レ得サル時ハ其旨ヲ記ス可シ

第四十三條 控訴ヲ為レ得可カラサル訴訟ニ付テハ前條ノ調書ヲ記スルニ及ハス裁判言渡書ニ鑑定人ノ姓名誓詞并ニ其述フル所ノ結局ヲ記ス可シ

○第九章 治安裁判役ニ付キ故障ヲ述

フル事

第四十四條 左ノ諸件アル時ハ治安裁判役ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可シ

- 第一 裁判役自カラ訴訟ニ管係アル時
- 第二 裁判役原告又ハ被告ノ従兄弟ニ至ル迄ノ血属又ハ姻族ノ親タル時
- 第三 當時ヨリ前一年内ニ裁判役ト原告又ハ被告中ノ一方又ハ其配偶者又ハ其宗系ノ血属又ハ姻属ノ親トノ間ニ刑事ニ管レタル訴訟アリシ時

第四 裁判役ト原告又ハ被告中ノ一方又ハ其配偶者トノ間ニ當時民事ニ管レタル訴訟アル時

第五 裁判役訴訟ノ事ニ付キ原告又ハ被告ノ一方ニ書ヲ以テ旁諭レタル時

第四十五條 原告及ヒ被告中一方ノ者治安裁判役ニ付キ故障ヲ述ヘント欲スル時ハ其故障ヲ述フル趣意書ヲ記シ其擇ム所ノ使吏ヲシテ其書ヲ治安裁判所ノ書記官ニ送達セシメ書記官其書ノ正本ニ檢印ス可シ○其趣意

書ハ正本副本共ニ原告又ハ被告又ハ其名代人姓名ヲ手署レ副本ハ之ヲ書記局ニ納メ書記官直チニ裁判役ニ之ヲ示ス可シ

第四十六條 裁判役ハ二日內ニ其副本ノ紙尾ニ故障ノ申述ヲ承諾シ又ハ承諾セサル事并ニ其答辨ヲ記ス可シ

第四十七條 裁判役故障ノ申述ヲ承諾セサル答ヲ為レタル時ヨリ三日內又ハ裁判役前條ノ定期內ニ其答ヲ為サ、ル時ハ其定期後直ニ其故障ヲ述フル書面ノ副本ト別ニ裁判役

ノ答書アルニ於テハ其答書トヲ本人ノ願ニ
 因リ書記官ヨリ治安裁判所所在ノ地ヲ管轄
 スル初告裁判所ノ檢事ニ送達ス可レ但レ初
 告裁判所ニテハ雙方ノ者ヲ呼出スニ及ハス
 檢事ノ述フル所ヲ聽タル上八日內ニ終審ノ
 裁判ヲ為ス可レ

○第二卷 下等裁判所 初告裁判所及ヒ商

〔千八百六年四月十四日決定〕

○第一章 勸解

第四十八條 和解 民法第二百四十四條見合ヲ為スノ權

利アル者和解ヲ為スヲ得可キ事柄ニ付キ主
 タル訴訟ヲ初メテ為サントスルニハ原告人
 豫メ被告人ヲ治安裁判所ニ勸解ノ為メ呼出
 レ又ハ雙方ノ者互ニ勸解ノ為メ己レノ意ヲ
 以テ治安裁判所ニ出席シタル後ニ非レハ初
 告裁判所ニ於テ其訴訟ヲ為スヲ聽サス

第四十九條

左ノ諸件ニ付テハ勸解ノ式ヲ為

スニ及ハス

第一 官府及ヒ其附属ノ地、邑、公舍幼者治

産ノ禁ヲ受ケン者、遺物相續人ノ虧致シ

タル財産ノ管財人ニ管シタル訴訟

第二 迅速ナルトテ要スル訴訟

第三 主タル訴訟ニ他人ノ管涉セントス

ル訴訟第三百三十九條以下見合又ハ保證ニ付テノ訴訟

第百七十五條以下見合

第四 商業ノ事ニ付テノ訴訟

第五 負債ヲ償ハサルニ付キ禁錮ヲ受ケ

レ者自由ヲ得ントスルノ訴訟、負債者債

主ノ為メニ己レノ財産ヲ差押ヘラレタ

ルトテ免カレントスル訴訟、負債者人ヨ

リ金高ヲ得可キヲ債主ノ為メニ差留メ

ラレタルトテ免カレントスル訴訟、土地

及ヒ家屋ノ貸賃又ハ年金及ヒ養料ノ拂

方ヲ得ントスル訴訟、代書師裁判所費用

ノ償戻ヲ得ントスルノ訴訟

第六 二人以上ノ者ニ對シ為シタル訴訟

但シ其二人以上ノ者同一ノ管係アル時
ト雖凡亦此ノ如シ

第七 書類ノ驗真ヲ為スニ付テノ訴訟、本
人其代書師使吏等ノ所為ヲ知ラスト述
フル訴訟、裁判役數人ノ管轄相觸ル、時
其中ノ一人ニ定ム可キトニ付テノ訴訟、
裁判役ニ付キ故障ヲ述ヘ他ノ裁判役ノ
裁判ヲ受ク可キトニ付テノ訴訟、裁判役
不正ノ裁判ヲ為シタルニ因リ損失ヲ受
ケタル時其裁判ヲ取消レ其償ヲ得ント

スルニ付テノ訴訟、負債者ニ物件ヲ渡ス
可カラサル差留ヲ債主ヨリ受ケタル者
ニ對シテ為ス所ノ訴訟、負債者財産差押
ニ付テノ訴訟、義務ヲ盡クス為メ物件ヲ
提供スルトニ付テノ訴訟 民法第千二百
五十七條見令
原告被告互ニ其證書ヲ渡シ又ハ示ス可
キトニ付テノ訴訟、夫婦財産ヲ分ツトニ
付テノ訴訟、後見人及ヒ管財人ニ付テノ
訴訟、其他總テ法律ヲ以テ別段ニ指定メ
タル訴訟

第五十條 被告入左件ニ付テハ勸解ノ為メ次ニ記スル所ノ裁判所ニ呼出ヲ受ク可シ

第一 人權及ヒ物權ノ事ニ付テハ其住所ノ治安裁判役ノ面前ニ呼出サル可シ若シ被告入二人ナル時ハ原告入ノ擇ミテ其中一人ノ住所ノ治安裁判役ノ面前ニ呼出サル可シ

第二 商業ノ會社ヲ除クノ外總テ會社ノ事ニ付テハ其會社ノ存續スル時間其會社ヲ設ケタル地ノ治安裁判役ノ面前ニ

呼出サル可シ

第三 遺物相續ノ事ニ付キ其分派ニ至ル迄ノ間其相續人等ノ互ニ為ス訴訟及ヒ分派ノ前死者ノ債者ヨリ為レタル訴訟并ニ分派ノ裁判言渡ノ確定ニ至ル迄ノ間遺囑ノ贈遺ヲ行フノ為メノ訴訟ニ付テハ其遺物相續ヲ為ス可キ地ノ治安裁判役ノ面前ニ呼出サル可シ

第五十一條 被告入勸解ノ為メ治安裁判所ニ出席ス可キ呼出狀ノ送達ヲ受ケタルヨリ出

席ヲ為ス日ニ至ル迄三日ヨリ少カラサル猶
豫ヲ得可シ

第五十二條 呼出狀ハ被告人住所ノ治安裁判
所ノ使吏之ヲ送達ス可シ但シ呼出狀ニハ勸
解ノ目的ヲ簡略ニ記ス可シ

第五十三條 雙方ノ者ハ勸解ノ為メ自カラ出
席ス可シ若シ故障アル時ハ名代人ヲ出ス可シ

第五十四條 原告人ハ出席ヲ為シタル上已レ
ノ要ムル所ヲ辨明スルヲ得又ハ其求ムル
所ヲ更ニ増加レテ述フルヲ得可シ又被告

人モ已レノ至當ト思フ所ヲ述フルヲ得可
シ○此事ニ付キ記ス可キ調書ニハ勸解ヲ為
スニ付テノ箇條ヲ記シ若シ勸解スルヲ能ハ
サル時ハ其旨ヲ簡略ニ附記ス可シ○雙方ノ
者勸解ニ付テノ契約ヲ其調書ニ記入シタル
時ハ私ノ契約書ノカアリトス
第五十五條 一方ヨリ他ノ一方ニ擔ヲ求ムル
時ハ裁判役之ヲ許ス可シ又其求メテ受ケタ
ル者之ヲ為スヲ肯セサル時ハ其旨ヲ記ス
可シ

第五十六條 一方ノ者出席ヲ為サ、ル時ハ十
 フラニクノ罰金ヲ言渡サレ且既ニ其罰金ヲ
 拂フタルノ證ヲ立ル迄ハ裁判所ニテ其者ニ
 訴訟ヲ為スコトヲ許サス

第五十七條 期滿得免ノ權ヲ得ントスル者勸
 解ノ為メ呼出ヲ受ケ出席ヲ為サス又ハ出席
 ヲ為スト雖モ勸解ヲ為スト能ハサル時其日
 ヨリ一月内ニ訴訟ヲ受クルニ於テハ期滿得
 免ノ權ヲ得可キ期限ノ既ニ經過シタル時間
 ヲ除棄シ借貸ノ息銀又ハ土地家屋ノ入額ヲ

償フ可キノ義務ヲ生ス可シ

第五十八條 若シ一方ノ者出席セサル時ハ沿
 安裁判所ノ書記局ノ簿冊ト呼出狀ノ正本又
 ハ副本トニ其旨ヲ記ス可シ但シ此場合ニ於
 テハ別ニ其事ニ付テノ調書ヲ記スルニ及ハ
 ス

○第二章 下等裁判所ニ呼出ス事

第五十九條 人權ノ事ニ付テハ被告人其住所
 ノ裁判所ニ呼出サル可シ若シ其住所ノ知レ
 サル時ハ寄居スル地ノ裁判所ニ呼出サル可

若シ被告人数人アル時ハ原告人ノ擇ミニ從
 ヒ其中一人ノ住所ノ裁判所ニ呼出サル可シ
 物權ノ事ニ付テハ其物件所在ノ地ノ裁判所
 ニ呼出サル可シ
 人權ト物權ト相混シタル事ニ付テハ其物件
 所在ノ地ノ裁判所又ハ被告人住所ノ裁判所
 ニ呼出サル可シ
 會社ノ事ニ付テハ其會社ノ存続スル時間之
 ノ設ケタル地ノ裁判所ニ呼出サル可シ

遺物相續ノ事ニ付キ其分派ニ至ル迄ノ時間
 其相續人等ノ互ニ為ス訴訟及ヒ分派ノ前死
 者ノ債主ヨリ為シタル訴訟并ニ分派ノ裁判
 言渡ノ確定ニ至ル迄ノ時間遺囑ノ贈遺ヲ執
 行スルノ為メノ訴訟ニ付テハ其遺物相續ヲ
 為ス可キ地ノ裁判所ニ呼出サル可シ
 家資分散ノ事ニ付テハ分散人住所ノ裁判所
 ニ呼出サル可シ
 保證ノ事ニ付テハ主タル訴訟ヲ為シタル裁
 判所ニ呼出サル可シ

證書、如ク執行フコニ付キ別段住所ヲ擇ミタル時ハ民法第百十一條ニ循ヒ別段擇ミタル住所ノ裁判所又ハ被告人ノ真ノ住所ノ裁判所ニ呼出サル可シ

第六十條 裁判所ニ管シタル官吏代書師使吏等ヲ云フ裁判所費用ノ償戻ヲ得ントスル時ハ以前其費用ノ生シタル裁判所ニ之ヲ訴出ス可シ

第六十一條 呼出狀ニハ左件ヲ記ス可シ
第一 年月日、原告人ノ姓名、職業、住所、其者ニ代ル可キ代書師ヲ任レタル事及ヒ原

告人其代書師ノ家ニ別段住所ヲ擇ミタル事

但シ代書師ノ家ニ別段住所ヲ擇ミタル事ナキ時ハ其旨ヲ記ス可シ

第二 呼出狀ヲ送達スル使吏ノ姓名、住居、授任狀、被告人ノ姓名、住居并ニ呼出狀ノ副本ヲ別ニ受取ル可キ者アル時ハ其者ノ姓名ヲ記ス可シ

第三 訴訟ノ目的及ヒ訴訟ヲ為ス憑據ノ簡略ナル辨明

第四 訴訟ヲ審判ス可キ裁判所及ヒ其裁

判所ニ出席ス可キ猶豫ノ期限

但シ此諸件ヲ記セサル時ハ其呼出狀ノ

効ナカル可シ

第六十二條 使吏ヲシテ呼出狀ヲ送達セシム

ル謝金ハ一日分餘ノ額ヲ拂フ可カラズ

第六十三條 裁判所ノ上席人ヨリ允許ヲ得サ

レハ祭日ニ呼出狀ヲ送達ス可カラズ

第六十四條 物權ノミニ管シタル訴訟又ハ人

權ト物權ト相混レタル事ニ付テノ訴訟ノ時

ハ呼出狀ニ不動産ノ種類其所在ノ邑ノ名及

ヒ知ルヲ得可キニ於テ其邑中不動産所在ノ

部分并ニ其不動産ニ隣レル地ノ中少ナクト

モ二箇所ヲ記ス可シ但シ一團ヲ為シタル不

動産ニ管シタル時ハ其名ト其所在ノ地ヲ記

スルヲノミテ以テ足レリトス若シ此等ノ事

ヲ記セサル時ハ其呼出狀ヲ取消ス可シ

第六十五條 其呼出狀ト共ニ勸解ヲ為シ得サ

ル事ノ調書ノ寫又ハ勸解ニ出席セサル事ヲ

記レタル書ノ寫ヲ送達ス可シ若シ之ヲ送達

セサル時ハ其呼出狀ノ効ナカル可シ○又呼出狀ト共ニ訴訟ヲ為スノ憑據タル證書ノ全部又ハ一部ノ寫ヲ送ル可シ但シ此等ノ寫ヲ呼出狀ト共ニ送達セサル時ハ後ニ吟味ノ時原告人其寫ヲ送ルコトアリト雖モ其寫ノ費用ヲ裁判費用中ニ加フ可カラズ

第六十六條 使吏ハ總テ自己ノ宗系ノ血屬又ハ姻屬ノ親及ヒ其婦ノ宗系ノ血屬及ヒ姻屬ノ親ノ為メニ呼出狀ヲ送達ス可カラズ又其再從兄弟以上ナル自己ノ傍系ノ血屬及ヒ姻

屬ノ親ノ為メ呼出狀ヲ送達ス可カラズ若シ此規則ニ背ク時ハ其呼出狀ノ効ナカル可シ

第六十七條 使吏ハ呼出狀ノ正本及ヒ副本ノ末ニ其謝金ノ高ヲ記入ス可シ若シ之ヲ記セサル時ハ後ニ其呼出狀ヲ官署ノ簿冊ニ登記スル時五フランクノ罰金ヲ出ス可シ

第六十八條 呼出狀ハ被告人ニ之ヲ渡シ又ハ其住所ニ之ヲ渡ス可シ然モ被告人ノ住所ニ其被告人及ヒ其親族從者ノ共ニアラサル時ハ使吏其呼出狀ノ副本ヲ近隣ノ者ニ渡シ近

隣ノ者其正本ニ其姓名ヲ手署ス可シ若シ其
 近隣ノ者姓名ヲ手署スルコトヲ得ス又ハ手署
 スルコトヲ欲セサル時ハ使吏其副本ヲ其邑長
 又ハ其輔佐役ニ渡シ此等ノ者謝金ヲ得スシ
 テ正本ニ檢印ヲ為ス可シ
 使吏ハ其正本及ヒ副本ニ此等ノ諸事ノ附記
 ス可シ

第六十九條

第一 官府ヲ其土地ノ事ニ管シタル訴訟
 ニ付キ呼出ス時ハ其訴訟ヲ審判ス可キ

裁判所所在ノ地ノ州長又ハ其住所ニ呼
 出狀ヲ送達ス可シ

第二 官府ノ會計局ヲ訴訟ノ事ニ付キ呼
 出ス時ハ其官吏又ハ其官署ニ呼出狀ノ
 送達ス可シ

第三 官署又ハ公舎ヲ訴訟ニ付キ呼出ス
 時ハ其本局所在ノ地ニ於テハ其本局ニ
 呼出狀ヲ送達シ其他ノ地ニ於テハ其委
 負又ハ其官署ニ送達ス可シ

第四 皇帝ヲ其私領ノ事ニ付キ呼出ス時

ハ裁判所管轄地内ニ在ル檢事ニ其呼出
狀ヲ送達ス可シ

第五 邑ヲ呼出ス時ハ邑長又ハ其住所ニ
呼出狀ヲ送達シ巴勒ニ於テハ州長又ハ
其住所ニ之ヲ送達ス可シ

此五箇ノ場合ニ於テハ呼出狀ノ副本ヲ
受取リタル者其正本ニ檢印ス可シ若シ
之ヲ受取ル可キ者其所ニ在ラス又ハ其
所ニ在リト雖モ檢印ヲ為スヲ肯セサ
ル時ハ治安裁判所ノ裁判役又ハ初告裁

判所檢事其檢印ヲ為シテ其呼出狀ノ副
本ヲ受取ル可シ 第十三十九條
ヲ見合ス可シ

第六 商社ヲ其社ヲ結ヒタル時間呼出ス
時ハ其商社ノ家ニ呼出狀ヲ送達ス可シ
又既ニ商社ヲ解キタル後ハ其社中ノ者
又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ

第七 家資分散人ノ連結セレ債主ヲ呼出
ス時ハ其管理者又ハ其住所ニ呼出狀ヲ
送達ス可シ

第八 佛蘭西國內ニ分明ナル住所アラサ

ル者ヲ呼出ス時ハ其寄居スル場所ニ呼出状ヲ送達ス可シ若シ其寄居スル場所ノ知レサル時ハ訴訟ヲ審判ス可キ裁判所ノ訟庭ノ最大ノ門扉ニ呼出状ノ副本一通ヲ貼附シ又一通ヲ檢事ニ送達シ檢事其正本ニ檢印ヲ為ス可シ

第九 佛蘭西本國外ノ佛蘭西領地ニ居住スル者又ハ外國ニ居住スル者ヲ呼出ス時ハ訴訟ヲ審判スル裁判所ノ檢事ニ呼出状ヲ送達シ其官吏其正本ニ檢印ヲ為シ

テ其副本ヲ本國外ノ領地ニ居住スル者ニ付テハ海軍事務宰相ニ送達シ外國ニ居住スル者ニ付テハ外國事務宰相ニ送達ス可シ

第七十條 前二條ニ定メタル規則ニ循ハサルニ於テハ其呼出状ノ効ナカル可シ

第七十一條 使吏ノ過失ニテ呼出状ノ効ナキニ至リシ時ハ其使吏呼出状送達ノ謝金ヲ失ヒ及ヒ取消ストナリタル訴訟ノ費用ヲ償ヒ且其時ノ模様ニ因リ原告人ニ其損害ノ償ヲ

為ス可シ

第七十二條 佛蘭西國內ニ住居スル者ニ付テ
 ハ呼出狀ヲ送達シタルヨリ裁判所ニ出席ス
 ルニ至ル迄ノ定期ヲ八日トス
 迅速ニ審判ヲ為ス可キ場合ニ於テハ裁判所
 ノ上席人原告人ノ別段ノ願ニ因リ定期ヨリ
 モ更ニ速ニ被告人ヲ呼出スルヲ許ルスノ言
 渡ヲ為シ得可シ

第七十三條 一千八百六十二年五月三日如左換
 乙佛蘭西本國外ニ在ル者呼出ヲ受クル時ハ

其呼出ヲ受ケタルヨリ裁判所ニ出席スルニ
 至ル迄ノ期限左ノ如シ

第一 「コルス」島「アルゼリ」不列顛諸島以

太利佛蘭西ニ隣接シタル國ニ在ル者ニ
 付テハ一月ノ時間

第二 其他歐羅巴又ハ地中海ノ濱岸又ハ

黒海ノ濱岸ニ於ケル國ニ在ル者ニ付テ
 ハ二月ノ時間

第三 歐羅巴外ニテ「マダカ」ノ海峡及「ソシ
 ド」ノ海峡ヨリ近ク又ハ「ホル」岬ヨリ近

キ地ニ在ル者ニ付テハ五月ノ時間

第四 「マラカノ海峡及ソンドノ海峡又ハ

「ホルン」岬ヨリ遠キ國ニ在ル者ニ付テハ

八月ノ時間

但シ海上戦争ノ時ハ海外ニ在ル者ノ為

メ其定期ヲ倍ス可シ

第七十四條 佛蘭西國外ニ住所アル者佛蘭西

ニ在ル時呼出ヲ受ケタルニ於テハ佛蘭西國

内ニ住所アル者ト同一ノ定期内ニ出席ス可

シ但シ別段ノ道理アリテ裁判所ニテ其定期

ヲ更ニ延シタル時ハ格別ナリトス

○第三章 被告人代書師ヲ任スル事及

ヒ被告人ノ答辯

第七十五條 被告人ハ呼出狀ヲ受ケタル日ヨ

リ裁判所ニ出席スル迄ノ定期内ニ其代書師

ヲ任ス可シ但シ此事ニ付テハ其任ヲ受クル

代書師ヨリ原告人ノ代書師ニ書ヲ送達シテ

之ヲ報知ス可シ○被告人及ヒ原告人其代書

師ヲ退クル時ハ更ニ之ニ代ヘテ代書師ヲ任

ス可シ若シ以前ノ代書師ヲ退ケ他ノ代書師

ヲ任セサルニ於テハ以前ノ代書師ノ取扱ヒタル訴訟及ヒ其言渡サレタル裁判ノ効アリトス

第七十六條 原告人通常ノ定期ヨリ更ニ短キ期限内ニ被告人ヲ出席セシム可キトテ訴タル時ハ被告人其期限ノ終ル日ニ其代書師ト為サントスル者ヲ吟味ノ席ニ出テシメ裁判役其席ニテ其者ヲ被告人ノ代書師ニ任スルトテ許ス言渡書ヲ與フ可シ但シ此言渡書ハ別段之ヲ寫取ルニ及ハス然レモ其代書師ハ

其日ノ内ニ被告人ニ代書師ノ任ヲ受ケタルトテ原告人ノ代書師ニ書ヲ以テ報知ス可シ若シ之ヲ報知セサルニ於テハ被告人ノ代書師ノ費用ニテ全上ノ言渡書ヲ寫取リ之ヲ原告人ノ代書師ニ送達ス可シ

第七十七條 被告人代言人ヲ任シタル日ヨリ十五日内ニ答辯書ヲ記シ其代書師姓名ヲ手署シテ之ヲ原告人ニ送達ス可シ但シ其答辯書ニハ被告人己レノ證書類ヲ其代書師ヲシテ原告人ノ代書師ニ送達セシム可キト又ハ

ヲ任セサルニ於テハ以前ノ代書師ノ取扱ヒ
タル訴訟及ヒ其言渡サレタル裁判ノ効アリ
トス

第七十六條 原告人通常ノ定期ヨリ更ニ短キ
期限内ニ被告人ヲ出席セシム可キヲ訴タ
ル時ハ被告入其期限ノ終ル日ニ其代書師ト
為サントスル者ヲ吟味ノ席ニ出テシメ裁判
役其席ニテ其者ヲ被告入ノ代書師ニ任スル
トヲ許ス言渡書ヲ與フ可シ但シ此言渡書ハ
別段之ヲ寫取ルニ及ハス然レモ其代書師ハ

其日ノ内ニ被告入ニ代書師ノ任ヲ受ケタル
トヲ原告人ノ代書師ニ書ヲ以テ報知ス可シ
若シ之ヲ報知セサルニ於テハ被告入ノ代書
師ノ費用ニテ全上ノ言渡書ヲ寫取リ之ヲ原
告人ノ代書師ニ送達ス可シ

第七十七條 被告入代言人ヲ任シタル日ヨリ
十五日内ニ答辯書ヲ記シ其代書師姓名ヲ手
署シテ之ヲ原告人ニ送達ス可シ但シ其答辯
書ニハ被告入己ノ證書類ヲ其代書師ヲシ
テ原告人ノ代書師ニ送達セシム可キト又ハ

其證書類ヲ裁判所ノ書記局ニ納メ其局ニテ原告人ニ示ス可キヲ記ス可シ

第七十八條 被告人答辯書ヲ送達シタル日ヨリ八日以内ニ原告人ハ被告人ノ答辯書ニ再答ス可シ

第七十九條 若シ被告人其代書師ヲ任シタルヨリ十五日以内ニ其答辯書ヲ原告人ニ送達セサル時ハ原告人ノ代書師ヨリ被告人ノ代書師ニ裁判所ニ出ツ可キ招書ヲ送ル可シ

第八十條 原告人被告人ノ答辯書ニ再答ス可

キ期限ノ終リニ後原告人又ハ被告人已レノ代書師ヲシテ相手方ノ代書師ニ裁判所ニ出ツ可キノ招書ヲ送ラシム可シ又原告人ハ被告人ノ答辯書ヲ受取リニ後再答ヲ為サス其代書師ヲシテ直ニ招書ヲ送ラシムルヲ得可シ

第八十一條 前數條ニ記シタル以外ノ書類ノ費用ハ裁判費用中ニ加フ可カラス

第八十二條 一方ノ代書師ヨリ相手方ノ代書師ニ招書ヲ送り吟味ノ席ニ出ツ可キヲ求

メタル時ハ雙方共ニ其書ノ一通ノミノ費用ヲ裁判費用中ニ加フ可シ

○第四章 檢察官ニ報告スル事

第八十三條 左ノ訴訟ハ檢事ニ報告ス可シ

第一 國ノ安寧ニ管シタル訴訟、官府ニ管

シタル訴訟、官ニ屬シタル土地、邑并ニ公

舎ニ管シタル訴訟、貧人ノ為メ公ニナシ

タル贈遺ニ管セシ訴訟

第二 人ノ身上及ヒ後見ノ事ニ管シタル

訴訟

第三 裁判所ノ管轄異ナルヲ以テ其裁判

所ノ吟味ヲ受クルトテ拒ム訴訟

第四 數箇ノ裁判所ノ管轄相觸ル、時其

中一箇ノ裁判所ニ定ム可キ為メナシタ

ル訴訟、裁判役ニ付キ故障ヲ述フル訴訟

裁判役相手方ノ親族ナルニ付キ他ノ裁

判所ニ訴訟ヲ移サントスル訴訟

第五 裁判役不正ノ裁判ヲ為シタルニ因

リ其裁判ヲ取消サントスル訴訟第五條見

合

第六 夫ノ許諾ヲ得スレテ為シタル婦ノ
 訴訟、又ハ夫ノ許諾アリト雖モ其婦嫁資
 分括ノ契約ニテ婚姻ヲ結ビタル時其婦
 ノ嫁資ニ管レタル訴訟、幼者ノ訴訟、其他
 原告又ハ被告ノ一方管財人ノ補佐ヲ受
 クル訴訟

第七 失踪ノ思度ヲ受ケタル者ニ管シタ
 ル訴訟
 又檢事ハ其他ノ訴訟ト雖モ己ノ干渉
 ス可キヲ必要ナリト思量スル時ハ其

訴訟ノ報告ヲ得ント求ム可シ又裁判所
 ヲリ其職務ヲ以テ檢事ニ訴訟ヲ報告ス
 可キノ言渡ヲ為スヲ得可シ

第八十四條 檢事及ヒ其代役ノ共ニ失踪トナ
 リ又ハ故障アル時ハ裁判役中ノ一人又ハ其
 代役中ノ一人之ニ代ル可シ

○第五章 吟味ノ事、吟味ノ公ケナル事、
 吟味取締ノ規則

第八十五條 原告被告ハ其代書師ノ助ケヲ得
 テ自カラ辯論スルヲ得可シ然モ原告又ハ

被告ノ心情ニ因リ又ハ其者事故ヲ經サルニ
 因リ相當ノ禮義ヲ以テ其趣意ヲ述フルト能
 ハス又ハ裁判役ノ了知シ得可キ様ニ其意ヲ
 明白ニ述フルト能ハサルヲ裁判所ニテ知リ
 タル時ハ自カラ辯論スルヲ禁スルトヲ得可
 シ

第八十六條 雙方共ニ相談ノ為メノミタリト
 モ在職ノ裁判役檢察長、代言代長、檢察并ニ此
 等ノ名代人ヲシテ縱令掛リ以外ノ裁判所ト
 雖モ口上又ハ書面ヲ以テ己レノ訴訟ヲ助ケ

シムルトヲ任ス可カラス然レモ此等ノ官吏
 并ニ其名代人ハ何レノ裁判所ニ於テモ己レ
 ノ身ニ管シタル訴訟、其婦ニ管シタル訴訟、宗
 系ノ血屬又ハ姻屬ノ親ニ管シタル訴訟、其後
 見ヲ為ス幼者ニ管シタル訴訟ヲ為シテ自カ
 ラ辯論スルトヲ得可シ

第八十七條 雙方ノ辯論ハ別段法律ニテ陰密
 ニ為ス可キトヲ定メタル場合ノ外之ヲ公ケ
 ニ為ス可シ○然レモ公ケニ辯論ヲ為ス時ハ
 甚シキ恥辱又ハ不都合ヲ生ス可キニ於テハ

陰密ニ辯論ス可キヲ裁判所ヨリ言渡ス
 ヲ得可シ然レ其言渡ヲ為シントスルニハ裁
 判役等評議ヲ為シ其評議ノ旨ヲ控訴院ノ檢
 事長ニ告知ス可シ又控訴院ニ為シタル訴訟
 ノ時ハ之ヲ裁判事務宰相ニ告知ス可シ
 第八十八條 吟味ノ席ニ出ツル者ハ皆帽ヲ脱
 シ裁判所ヲ敬禮シテ静黙シ且總テ裁判所ノ上
 席人ヨリ喧躁ヲ防ク可キ為メ言渡シタル諸
 事ハ直ニ之ヲ細密ニ循守ス可シ
 裁判所以外ノ地ニテ裁判役又ハ檢事ノ職務

ヲ行ノ場所ニ於テモ亦此規則ヲ通シ用フ可
 シ

第八十九條 原告被告ノ互ニ辯論スル時又ハ
 裁判役及ヒ檢察官ノ言詞ヲ述フル時又ハ裁
 判所ノ上席人掛リ裁判役及ヒ檢事問糾譴責
 命令ヲ為ス時又ハ裁判役ノ言渡ヲ為ス時ニ
 當リ妄ニ言語ヲ發シ又ハ賞賛及ヒ誹謗ヲ為
 シ又ハ如何ナル方法ヲ問ハス喧躁スル者使
 吏ノ譴責ヲ受ケ猶止メサル時ハ吟味ノ席ヲ
 退ク可キヲ命シ若シ其命ニ従ハサル時ハ

佛蘭西訴訟法

三九 裁判所

之ノ捕ヘテ直チニ二十四時間裁判所附属ノ
獄舎ニ繋ク可シ但シ獄舎ニ於テハ吟味ノ調
書ニ記シタル裁判所上席人ノ命令書ヲ視タ
ル上其犯人ヲ受取ル可レ

第九十條 若シ裁判所ニテ職務ヲ行フ者其喧
躁ヲ為シタル時ハ前條ニ記シタル罰ノ外定
期ノ時間其職ヲ罷メラル可シ但レ初犯ニ付
テハ其定期三月ニ過ク可カラス○其言渡ハ
前條ノ場合ニ等シク假ニ之ヲ執行フ可シ
第九十一條 裁判役又ハ其他裁判所ノ官吏ニ

其職務ヲ行フニ當リ之ニ不敬ヲ加ヘ又ハ劫
迫シタル者ハ裁判所ノ上席人及ヒ掛リ裁判
役又ハ檢事ノ命ニテ之ヲ捕ヘ直チニ裁判所
附属ノ獄舎ニ繋キテ二十四時間ニ吟味ヲ為
シ裁判所ニテ其罰犯ヲ證スル調書ヲ視タル
上一月ニ過キサル時間之ヲ禁錮ノ刑ニ處シ
且二十五「フラン」ヨリ少カラス三百「フラン」
クヨリ多カラサル罰金ヲ言渡ス可シ
若シ其犯人ヲ直チニ捕フルヲ能ハサル時ハ
裁判所ヨリ二十四時間ニ其者ニ付キ前ニ記

シタル罰ヲ言渡ス可シ但シ其者十日内ニ自
カラ出訴シテ獄舎ニ入ル時ハ其罰ノ言渡シ
ニ付キ故障ヲ述フルコトヲ得可シ

第二十九條 若シ其罪施體又ハ加辱ノ刑ニ處
ス可キモノタル時ハ其犯人ヲ捕ヘテ刑法裁
判所ニ送り治罪法ニ定メタル規則ニ循ヒ其
罪ヲ訴ヘ之ヲ罰ス可シ

○第六章 裁判役ノ評議及ヒ書面ニ因
テ吟味ヲ為ス事

第九十三條 裁判所ヨリ原告人及ヒ被告人ニ

證書類ヲ出ス可キ事并ニ掛リ裁判役一人ノ
申立ノ上其證書ニ因リ裁判役等ヲシテ評議
ヲ為サシム可キ事ノ言渡ヲ為ストコトヲ得可シ
但シ其言渡書ニハ掛リ裁判役ノ申立ヲ為ス
可キ期日ヲ記ス可シ申立ノ式ハ第百
十一條見合セ

第九十四條 原告被告雙方ノ者及ヒ其代書師
ハ前條ノ言渡書ノ寫ヲ得テ互ニ之ヲ送達ス
ル事及ヒ別段招書ヲ送ル事ノ手續ヲ行フニ
及ハスニテ其言渡ノ如ク執行ヲ可シ若シ一
方ノ者證書類ヲ出サ、ル時ハ他ノ一方ヨリ

出シタル證書類ノミニ據リ其訴訟ヲ裁判ス
可シ

第九十五條 雙方ノ辯論又ハ證書ノ評議ノ
ニテ訴訟ヲ裁判スルコトヲ得サル模様アル時
ハ掛リ裁判役一人ヲシテ裁判所ニ申立ヲ為
サシメタル上書面ニ因テ其吟味ヲ為ス可キ
コトヲ言渡ス可シ
此言渡ハ必ス吟味ノ席ニテ裁判役ノ可トス
ル者ノ數多キ時ニ非サレハ之ヲ為ス可カラ
ス

第九十六條 原告人ハ其言渡書ヲ被告人ニ送
達シタルヨリ十五日内ニ已レノ訴ヲ為ス憑
據ヲ記シタル願書裁判所ニ宛テ出スモノヲ被告人ニ送
達ス可シ但シ其願書ノ紙尾ニ已レノ證書類
ノ目錄ヲ附記ス可シ
原告人ハ其願書ヲ送達シタルヨリ二十四時
間ニ已レノ證書類ヲ裁判所ノ書記局ニ出シ
且之ヲ出シタルニ付キ被告人ノ證書類モ亦
之ヲ出ス可キコトヲ要ムル書ヲ被告人ニ送達
ス可シ

第九十七條 原告人ノ證書類ヲ書記局ニ出シタルヨリ十五日内ニ被告人書記局ニ至リ原告人ノ證書類ヲ受取リ且己レノ證書類ノ目錄ヲ附記シタル答辨書此答辨書ノ体裁原告人ノ願書ニ等シヲ原告人ニ送達シ其送達ノ時ヨリ二十四時間ニ原告人ノ證書類ヲ書記局ニ還レテ己レノ證書類ヲ出シ且之ヲ出シタル旨ヲ記シタル書ヲ原告人ニ送達ス可レ

被告人數人アリテ其權利及ヒ代書師ノ各異ナリタル時ハ被告人書記局ヨリ原告人ノ證

書類ヲ受取リ其答辨書ヲ送達シ且己レノ證書類ヲ書記局ニ出ス事ニ付キ各前ニ定メタル猶豫ノ期限ヲ得可レ但シ原告人ノ證書類ハ被告人中ノ最モ先ニ之ヲ要ムル者ヲ初トシ相次テ其他ノ者受取ル可レ

第九十八條 若原告人前ニ定メタル期限内ニ己レノ證書類ヲ書記局ニ出ササル時ハ被告人ヨリ前條記シタル如ク己レノ證書類ヲ書記局ニ出シ原告人ハ八日内ニ被告人ノ證書類ヲ書記局ヨリ受取テ其故障ヲ述フ可レ但

シ原告人其期限ヲ過コス時ハ被告人ノ出シタル證書ノミニ據リ裁判ヲ為ス可シ

第九十九條 若シ被告人定期内ニ已レノ證書類ヲ出サ、ル時ハ原告人ノ出シタル證書ノミニ據リ裁判ヲ為ス可シ

第一百條 被告人數人アリテ原告人ノ出シタル證書類ヲ定期内ニ受取ル者一人モテラサル時ハ原告人ノ出シタル證書ノミニ據リ裁判ヲ為ス可シ

第一百一條 被告人數人アル時原告人已レノ證

書類ヲ出サ、ルニ於テハ其數人中何レノ人ニ限ラス先ツ已レノ證書類ヲ書記局ニ出シ前ニ記シタル如ク吟味ヲ得ルノ手續ヲ為ス可シ

第一百二條 原告人又ハ被告人ノ一方ニテ更ニ證書類ヲ出サント欲スル時ハ之ヲ書記局ニ出シ其證書類ヲ出シタル旨ヲ記シタル書ニ其證書類ノ目錄ヲ附記シ之ヲ相手方ノ代書師ニ送達ス可シ但シ此場合ニ於テハ更ニ願書及ヒ其他ノ書類ヲ相手方ニ送達スルトナ

カル可シ若シ之ヲ送達シタル時ハ縦令更ニ
 出シタル證書類ノ目錄ニ添テ以前ト異リタル
 憑據ヲ附記シタルト雖モ此等ノ書類ノ費用
 ヲ裁判所費用中ニ加フ可カラス
 第百三條 更ニ出シタル證書類ハ相手方ニテ
 八日内ニ書記局ヨリ之ヲ受取り己レノ答辯
 書ヲ送達ス可レ但シ其答辯書ハ六葉ニ過ク
 可カラス

第百四條 雙方ノ代言人ハ訴ヲ為スノ憑據ヲ
 記シタル願書答辯書並ニ其他ノ書類ノ正本

副本及ヒ證書類ヲ書記局ニ出セシ旨ヲ記シ
 タル書ニ其葉數ヲ記ス可シ若シ之ヲ記セサ
 ル時ハ此等ノ書類ノ費用ヲ裁判所費用中ニ
 加フ可カラス

第百五條 此章ニ記レタル以外ノ書類ノ費用
 ハ裁判所費用中ニ加フ可カラス

第百六條 原告人又ハ被告人ノ書記局ニ出レ
 タル證書類ヲ相手方ニテ受取ルニハ代書師
 ヨリ其受取レ月日ヲ記レタル受取書ヲ書記
 局ニ出ス可シ

第百七條 若シ一方代書師相手方ノ出シタル
 證書類ヲ受取り之ヲ前ニ記シタル定期内ニ
 書記局ニ還サ、ル時ハ書記官ノ受合書ト相
 手方ノ代書師ヨリノ招書トニ因リ其證書類ヲ
 書記局ニ還シテ裁判ノ費用ヲ償ヒ且其遅延
 シタル一日毎ニ十¹フラン²ノ償ヲ相手方本
 人ニ拂フ可キノ言渡ヲ受ク可シ但シ其言渡
 ハ其代書師ノ一身ニ受クル所ニシテ且之ヲ
 控訴ス可カラス
 其代書師其言渡書ノ送達ヲ得タルヨリ八日

内ニ猶^ホ相手方ノ證書類ヲ書記局ニ還サ、ル
 時ハ裁判所ヨリ其代書師ニ前ニ記シタルヨ
 リ更ニ多數ノ償額ヲ出シレメ又ハ之ヲ禁錮
 シ且相當ト思量スル時間其職務ヲ行フヲ禁
 スル言渡ヲ為ス¹ヲ得可シ但シ其代書師ハ
 其言渡ヲ控訴ス可カラス
 相手方本人此等ノ言渡ヲ得ントスルニハ必
 ス別ニ代書師ヲ任スルニ及ハス唯裁判所ノ
 上席人又ハ掛リ裁判役又ハ検事ニ其言渡ヲ
 得ント求ムル書ヲ自カラ出ス¹ノミヲ以テ

足レリトス

第百八條 書記局ニハ一箇簿冊ヲ設ケ置キ原告被告ノ證書類ヲ出シタル順序ヲ以テ其出シタル證書類ヲ寫取ル可シ又其簿冊ハ直線ヲ畫シテ之ヲ區分シ其各部ニ證書ヲ出シタル日附原告被告雙方ノ姓名其代書師ノ姓名掛リ裁判役ノ姓名ヲ記ス可シ但シ其區分シタル中其一部ヲ空格ニ為シ置ク可シ

第百九條 原告被告共ニ其證書類ヲ出シタル時又ハ前ニ記シタル定期ノ終リシ後ハ書記

官先ニ願出ル者ノ求メニ從ヒ其證書類ヲ掛リ裁判役ニ渡シテ其裁判所簿冊ノ空格ノ部ニ已レノ姓名ヲ手書シ其證書類ヲ預カル可シ

第百十條 掛リ裁判役ノ死去シ又ハ其職ヲ退キ又ハ申立ヲ為スコト能ハサル時ハ原告人ノ願ニ因リ裁判所上席人ノ言渡ニテ更ニ掛リ裁判役ヲ任シ且其裁判役ヲ任シタル旨ヲ申立ノ期日ヨリ少クトモ三日前ニ被告人又ハ其代書師ニ報知ス可シ

第百十一條 總テ掛リ裁判役ノ申立ハ裁判役評議ノ為メト雖モ吟味ノ席ニテ之ヲ為ス可ク且申立ヲ為ス掛リ裁判役ハ己レノ説ヲ述フルヲナク其事情ト雙方ノ憑據トスル所トヲ簡略ニ述フ可シ又原告被告及ヒ其代書師ハ如何ナル口實アリト雖モ掛リ裁判役ノ申立ノ後辯論ヲ為ス可カラス唯掛リ裁判役ノ申立中ニテ完足ヤス又ハ正シカラスト思フ箇條ヲ辨明スル覺書ヲ直チニ裁判所ノ上席人ニ出スヲ得可シ

第百十二條 訴訟ヲ檢事ニ報知ス可キ場合ニ於テハ吟味ノ席ニテ其檢事ノ説ヲ聽ク可シ

第百十三條 原告人又ハ被告人ノ一方ニテ證書ヲ出スヲナク他ノ一方ノ證書ノニニ據リ裁判ヲ言渡シタル時ハ其證書ヲ出サ、ル者其裁判ノ故障ヲ述フルヲ得ス

第百十四條 裁判言渡ノ後掛リ裁判役ハ訟書類ヲ書記局ニ還シ之ヲ還シタル證トシテ嘗テ簿冊ニ手署シタル姓名ヲ塗抹ス可シ

第百十五條 代書師ハ證書類ヲ書記局ヨリ取

戻ス時簿冊ノ端ニ其姓名ヲ手署ス可シ但シ
代書師ノ姓名ノ手署ハ書記官其證書類ヲ還
シタルノ證トス可シ

○第七章 裁判言渡ノ事

第百十六條 裁判ハ裁判役中可トスル者ノ數
多キニ從ヒ即時ニ之ヲ為ス可シ然レ裁判役
ハ言渡ヲ為ス前ニ其會議ノ室ニ退キテ評議
ヲ為シ又ハ後ノ吟味ノ日迄裁判ノ言渡ヲ延
ハスコトヲ得可シ

第百十七條 裁判役中其說ノ二箇以上ニ分ル

、時ハ最モ寡數ノ說ノ裁判役多數ノ說ノ裁
判役中ノ一方ニ合同ス可シ然レ總數ノ說ヲ
再ヒ算ヘタル後ニ非レハ必シモ合同スルニ
及ハズ

第百十八條 可トスル者ノ數ト非トスル者ノ
數ト均シキ時ハ別ニ裁判役一員ヲ呼ヒ別ニ
裁判役アラサル時ハ裁判役ノ代員ヲ呼ヒ又
裁判役ノ代員アラサル時ハ其裁判所附屬ノ
代官人一員ヲ呼ヒ代官人アラサル時ハ代書
師一員ヲ呼ヒ再ヒ吟味ヲ為ス可シ但シ此等

ノ者ハ其任ヲ受ケタル順序ニ從ヒ之ヲ呼フ可シ

第百十九條 裁判所ヨリ原告及ヒ被告ニ其代

書師ヲ出サス自カラ出席ス可キヲ言渡ス

時ハ其出席ス可キ日ヲ言渡書ニ記ス可シ第

五章ニ記スル所ト異ナリ

第百二十條 誓ヲ為ス可ノ言渡書ニハ其誓ヲ

為ス可キ事柄ヲ記ス可シ

第百二十一條 誓ハ本人自カラ吟味ノ席ニテ

之ヲ為ス可シ○相當ニシテ且確証アル故障

アリテ本人出席スルヲ能ハサル時ハ裁判所

ヨリ特ニ任シタル裁判役書記官ト共ニ其家

ニ至リ己レノ面前ニテ誓ヲ為サシム可シ

誓ヲ為ス可キ者隔遠ノ地ニ居ル時ハ其訴訟

ヲ管スル裁判所ヨリ其居所ノ裁判所ニ於テ

誓ヲ為ス可キヲ言渡ス可シ

何レノ場合ニ於テモ誓ハ相手方ノ面前ニテ

之ヲ為シ又ハ己レノ代書師ヲシテ相手方ノ

代書師ニ招書ヲ送ラレメ相手方ヲ呼出シタ

ル上ニテ之ヲ為シ又相手方代書師ヲ任シタ

ルナキ時ハ誓ヲ為ス可キ日ヲ記シタル呼
出書ヲ送り相手方呼出シタル上ニテ之ヲ為
ス可シ

第百二十二條 裁判所ヨリ其裁判言渡ヲ執行
フニ付キ猶豫ノ期限ヲ許スコトヲ得可キ場合
ニ於テハ其裁判言渡書ヲ以テ其猶豫ヲ許ス可
シ但シ其言渡書ニハ猶豫ヲ許スノ趣意ヲ附
記ス可シ

第百二十三條 其猶豫ノ期限ハ原告被告雙方
ノ面前ニテ裁判ヲ言渡シタル時ハ其言渡ノ

日ヨリ之ヲ算ヘ又一方ノ者抗傳シテ言渡シ
タル時ハ其言渡書ヲ送達シタル日ヨリ之ヲ
算フ可シ

第百二十四條 負債者ノ相手方ニ非サル債主
ノ要メニ因リ其負債者ノ財産ヲ賣拂フタル
時又ハ其負債者家資分散ヲ為シタル時又ハ
其者抗傳シテ刑ノ言渡ヲ受ケタル時又ハ其
負債者禁錮セラレタル時又ハ負債者嘗テ契
約書ヲ以テ債主ニ約セシ保證ノ額ヲ減レタ
ル時ハ其負債者裁判言渡ヲ執行フノ猶豫ヲ

得可カラス 縱令其猶豫ヲ得タリト雖モ其効
ナカル可シ

第百二十五條 負債者裁判執行ノ猶豫ヲ得タ
ル時ト雖モ原告人即チ已レノ權利ヲ保全ス債主即チ已レノ權利ヲ保全スハ其効アルモノトス可シ

第百二十六條 被告人ヲ禁錮スルハ別段法
律上ニ因リ定メタル場合ニ非レハ之ヲ言渡
ス可ラス 然モ左件ニ付テハ裁判役ノ意ヲ以
テ禁錮ヲ言渡ス可シ得可シ

第一 民事ニ管レテ三百フラン以上償

額ヲ出サシムルコト

第二 後見人及ヒ管財人ノ算計ノ殘額會
社及ヒ公舎ノ支配又ハ總テ裁判所ヨリ
任シタル財産支配ノ算計ノ殘額ヲ還サ
シムル事

第百二十七條 裁判役ハ前條ノ場合ニ於テ禁
錮ノ言渡ノ如ク執行フコトヲ已レノ定メタル
時間猶豫ス可キ言渡ヲ為スコトヲ得可シ但シ
其猶豫ノ時間後ニ至リテハ再ヒ言渡ヲ為ス
コトナク直チニ之ヲ禁錮ス可シ○其猶豫ハ訴

訟ノ裁判言渡書ヲ以テ之ヲ許ス可ク且其言渡書ニ猶豫ヲ許スノ趣意ヲ附記ス可シ

第百二十八條 一方ノ者其相手方ニ償額ヲ拂フ可キ言渡書ニハ其額ヲ定メテ之ヲ附記シ又ハ相手方箇條書ヲ以テ其額ヲ定ム可キヲ附記ス可シ

第百二十九條 土地ノ收納物ヲ償還ス可キ言渡書ニハ最終ノ一年ニ付テハ物品ノ儘ヲ以テ償還ス可キヲ附記シ其前年ニ付テハ本年ノ豊凶ト其收納物ノ通償トニ注意シテ且

其最近ノ地ノ市場ノ數年間ノ相場書ニ從ヒ其價ヲ償フ可キヲ附記シ若シ其相場書ノアラサル時ハ評價人ノ説ニ循ヒ之ヲ償フ可キヲ附記ス可シ○若シ最終ノ一年ノ收納物ヲ品物ノ儘ニテ償還スルヲ能ハサル時ハ前年ノ如ク價ヲ以テ之ヲ償フ可シ

第百三十條 總テ負訴訟ノ者ハ裁判ノ費用ヲ拂フ可キノ言渡ヲ受ク可シ

第百三十一條 然レ夫婦ノ間又ハ卑屬ノ親ト尊屬ノ親トノ間又ハ兄弟姉妹ノ間又ハ之レ

ト同級ノ姻屬ノ親ノ間ニ於テハ裁判費用ノ全部又ハ一部ヲ互ニ消殺スルヲ得可シ又原告被告互ニ負訴訟ノ箇條アル時ハ裁判役ヨリ其裁判費用ノ全部又ハ一部ヲ互ニ消殺セシムルヲ得可シ

第百三十二條 代書師使吏其職限外ノ事ヲ為シタル時及ヒ後見人管財人又ハ遺物ノ額ニ至ル迄ノ外負債ヲ償ハサル特權アル相續人又ハ其他財産ヲ支配スル者其財産ノ損害トナル可キ事ヲ為シタル時ハ此等ノ者一身ノ

名義ニテ裁判費用ヲ拂フ可キノ言渡ヲ受ケ且本人ニ償額ヲ拂フ可キ道理アル時ハ之ヲ拂フ可キノ言渡ヲ受ク可シ但シ其時ノ模様ニ因リ代書師及ヒ使吏ハ定期ノ時間其職ヲ行フノ禁ヲ受ケ又後見人及ヒ其他ノ者ハ其職任ヲ退ク可キノ言渡ヲ受ク可シ

第百三十三條 克訴訟ノ代書師嘗テ其本人ノ為ノ多數ノ金額ヲ前拂トナシ置キタルヲ裁判言渡ノ時證スル時ハ相手方ヨリ出ス可キ費用ノ償ヲ本人ニ渡サスレテ己レノ方ニ

受取ル可キノ求メヲ為スヲ得可シ○其代書師ニ其費用ノ償ヲ渡ス可キトハ訴訟ノ裁判言渡書ヲ以テ之ヲ渡ス可シ但シ此場合ニ於テハ其代書師自己ノ名目ニテ相手方ヨリ其費用ノ償ヲ得ント求メ且裁判所ヨリ其言渡ノ如ク執行ヲ可キノ書ヲ受クルヲ得可シ若シ又其費用償ノ事ニ付キ代書師其本人ニ對シ訴訟ヲ為ス可キノ道理アル時ハ別ニ之ヲ為スヲ得可シ

第百三十四條 若シ主タル訴訟ニ添ヘ假ノ處

置ニ付テノ訴訟ヲ為シ且假ノ處置ニ付テノ訴訟ト主タル訴訟ト共ニ裁判レ得可キ手續ニ至リシ時ハ裁判役其二箇ノ訴訟ヲ共ニ裁決シテ一箇ノ言渡書ヲ記ス可シ

第百三十五條 保證人ヲ立ルヲナク假ニ言渡ノ如ク執行フトハ公正ノ證書及ヒ一方ノ者ノ許認シタル約束書アル時又ハ既ニ裁判ノ言渡ヲ受ケ之ヲ控訴セサル時之ヲ言渡ス可シ

左件ニ於テハ假ニ言渡ノ如ク執行フトニ付

キ保證人ヲ立テ又ハ保證人ヲ立ルニ及ハサル言渡ヲ為ス₁自由ナリトス

第一 封印ヲ為ス事及ヒ之ヲ除ク事又ハ目錄ヲ記スル事

第二 至急ナル家屋ノ補理

第三 土地家屋等ノ借受ノ證書ナキ時又ハ其借受ケノ證書ノ期限ノ終リ_レ時其借主ヲ其土地又ハ家屋ヨリ退出セシムル事

第四 雙方互ニ相争_フ物件ノ附托ヲ受ク

ル者及ヒ負債者ノ財産ヲ抵償トシテ差押ヘタル時之ヲ預カル者

第五 保證人及ヒ保證人ヲ更ニ保證スル者ヲ承諾スル事

第六 後見人管財人及ヒ其他財産ノ支配人ヲ任スル事及ヒ此等ノ者ヨリ算還ヲ為サシムル事

第七 養料

第百三十六條 若シ裁判役言渡ノ如ク假ニ執行_ヲ可キ_ト言渡ヤ_ル時ハ其裁判所ニテ

後ニ之ヲ言渡スヲ得ス但シ原告人又ハ被告
人ハ控訴シテ假ニ之ヲ執行ノ可キノ願ヲ
為スヲ得可シ

第百三十七條 裁判ノ費用ハ負訴訟ノ者償額
ニ代ヘ之ヲ出ス可キノ言渡アル時ト雖其
言渡ノ如ク假ニ之ヲ執行ノ可カラス

第百三十八條 裁判所ノ上席人及ヒ書記官ハ
言渡アル毎ニ直チニ其言渡書ノ正本ヲ記シ
テ姓名ヲ手署ス可シ又其言渡書ヲ記シタル
聴訟ノ簿冊ノ端ニ其裁判言渡ニ出席シタル

裁判役及ヒ檢事ノ姓名ヲ附記シ之ヲ附記シ
タル部分ニモ亦上席人及ヒ書記官其姓名ヲ
手署ス可シ

第百三十九條 若シ書記官前條ニ記シタル如
ク姓名ノ手署ヲ為サル前ニ裁判言渡書ノ
寫ヲ原告人又ハ被告人ニ渡シタル時ハ贋造
者ナリトシテ訴訟ヲ受ク可シ

第百四十條 檢事長及ヒ檢事ハ毎月言渡書ノ
正本ヲ視テ前條ノ規則ヲ行フタルヤ否ヤヲ
檢査シ若シ規則ニ背キタルヲル時ハ其事

ヲ調書ニ記シテ相當ノ處置ヲ為ス可シ
 第四百十一條 裁判言渡書ニハ裁判役并ニ檢
 事ノ姓名及ヒ代書師ノ姓名原告及ヒ被告ノ
 姓名職業居所雙方論辯ノ趣意訴訟ノ事柄并
 ニ其事柄ニ法律ヲ當テ用フル箇條言渡ヲ為
 スノ趣意及ヒ言渡ノ條件ヲ記ス可シ
 第四百十二條 其裁判言渡書ハ原告及ヒ被告
 ノ雙方互ニ送達シタル身元書ニ從テ之ヲ記
 ス可シ故ニ雙方出席ノ上ノ裁判言渡書一通
 ヲ得ント欲スル者ハ雙方ノ姓名職業居所論

辨ノ趣意訴訟ノ事柄及ヒ其事柄ニ法律ヲ當
 テ用フル箇條ヲ記セシ身元書ヲ相手方ノ代
 書師ニ送達ス可シ
 第四百十三條 其身元書ノ正本ハ吟味掛リノ
 使吏二十四時間預リ置ク可シ
 第四百十四條 相手方ノ代書師身元書此條ニ
 記スルニ
 所ノ身元書ノ字義ハ前條ニ付キ故障ヲ述ヘ
 ニ記スル所ト差異ナリ又ハ訴訟ノ事柄并ニ其事柄ニ法律ヲ當テ用
 フル箇條ニ付キ故障ヲ述ヘント欲スル時ハ
 之ヲ使吏ニ述ヘ使吏其旨ヲ附記ス可シ

第百四十五條 一方ノ代書師ヨリ相手方ノ代書師ニ招書ヲ送達シテ之ヲ呼出シタル上裁判所ノ上席人前條ニ記シタル故障ノ申述ヲ裁決ス可シ若シ上席人差支アルニ於テハ裁判役中ニテ最モ先ニ任ヲ受ケタル者之ヲ裁決ス可シ

第百四十六條 裁判言渡書ノ寫ノ首尾ニハ佛蘭西共和政治立國第十二年¹⁸⁰³プロレ¹⁸⁰⁴ル月ノ憲法ヲ以テ定メタル所ノ文詞ヲ記ス可シ^{之ヲ名ケテ}命^ヲ裁^ル判^定言^渡ノ^文詞^ト云^フフ

第百四十七條 總テ裁判所ノ言渡書ノ寫ハ之ヲ相手方ノ代書師ニ送達シタル上ニ非レハ其言渡ノ如ク執行フ可カラス若レ此規則ニ背ク時ハ其言渡ノ効ナカル可シ又假ノ言渡ト確定ノ言渡トヲ問ハス相手方ノ負訴訟トナル言渡書ノ寫ハ相手方ノ代書師ノミニ非ス亦其本人又ハ其住所ニ之ヲ送達ス可シ但シ其寫ニ代書師ニハ別ニ同上ノ寫ヲ送達シタル旨ヲ附記ス可シ

第百四十八條 代書師既ニ死去シ又ハ其職務

ヲ行フヲ止メシ時ハ本入ニ言渡書ノ寫ヲ送達シタルヲ以テ足レリトス然レ其寫ニハ代書師ノ死去シタルヲ又ハ其職務ヲ止メタルヲ記ス可シ

○第八章 原告又ハ被告ノ一方抗傳シタル儘ニテ裁判ヲ言渡ス事及ヒ其言渡ニ付キ故障ヲ述フル事

第百四十九條 若シ被告ノ代書師ヲ任スルヲナク又ハ其任シタル代書師吟味ノ為メ定メタル日ニ出席セサル時ハ被告ノ抗傳者タ

ルヲ言渡ス可シ

第百五十條 被告ノ抗傳者ナクト言渡スハ吟味ノ席ニテ使吏被告ノ姓名書ヲ讀ミ上ケタル上之ヲ為ス可シ○此時原告ノ訴フル所正シク且確證アリト見ユル時ハ其訟フル所ヲ許ス言渡ヲ為ス可シ然レ裁判役ハ次ノ吟味ノ日其言渡ヲ為ス可キ為メ原告ニ其證書類ヲ書記局ニ出ス可キヲ命スルヲ得可シ

第百五十一條 一箇ノ訴訟ニ付キ被告ノ數人

呼出ヲ受ケ其代書師ヲ任スル期日及ヒ其代書師ノ出席ス可キ期日ノ各異ナル時ハ其中ニテ最後ノ猶豫ノ期限ヲ得タル者其期日ニ至リ猶代書師ヲ任スルヲナク又ハ之ヲ任シタリト雖モ其出席ヲ為サ、ル時ニ非レハ何レノ被告人ニ付テモ抗傳ノ言渡ヲ為ス可カラス

第百五十二條 抗傳ノ言渡ヲ受クル被告人數人ハ共ニ其言渡ヲ受ク可シ若シ原告人ノ代書師ノ求メニ因リ被告人各自ニ付キ抗傳ノ

言渡ヲ為シタル時ハ其各自ノ言渡ノ費用ヲ裁判所費用中ニ加フ可カラス其原告人ノ代書師自カラ之ヲ擔當ス可ク原告人ヨリ之ヲ取返ス可カラス

第百五十三條 被告人二人以上呼出ヲ受ケ其中抗傳ヲ為ス者ト抗傳ヲ為サ、ル者トアル時ハ其抗傳ヲ為ス者代書師ヲ任シ又ハ其代書師出席ヲ為スニ至ル迄暫ク其裁判ヲ猶豫ス可キ言渡ヲ為シ其言渡書ヲ別段任ヲ受ケレ使吏ヨリ抗傳者ニ送達ス可シ但レ其言渡

書ニハ後ノ期日ニ至リ代書師ヲ任ス可キト
 又ハ代書師ノ出席ヲ為ス可キトヲ附記ス可
 シ○其日ニ至リシ時ハ訴訟ノ裁判ヲ為シテ
 共ニ箇ノ言渡書ヲ渡ス可シ但シ其時ニ至リ
 以前ノ抗傳者猶代書師ヲ任セス又ハ代書師
 ノ出席セサル時ハ其抗傳者後ニ其言渡ニ付
 キ故障ヲ述フルトヲ得ス

第百五十四條 被告人ハ代書師ヲ任シタル上
 ニテ己レノ答辯書第百七十七條見合ヲ出ストナク其
 代書師ヲシテ原告人ノ代書師ニ招書ヲ送ラ

シメ吟味ノ席ニ出ツ可キトヲ求メ其代書師
 猶ホ出席セサル時ハ被告人原告人ノ抗傳者
 タル言渡ヲ受クルトヲ得可シ

第百五十五條 被告人代書師ヲ任シ其代書師
 出席スト雖モ論辨ヲ為サ、ルニ因リ其被告
 人抗傳者トナリタル時ニ為シタル裁判言渡
 ハ其代書師ニ其言渡書ヲ送達シタルヨリ八
 日ノ期限内ニ之ヲ執行フ可カラズ又代書師
 ヲ任シ其代書師出席セサル時ハ本人又ハ其
 住所ニ之ヲ送達シタルヨリ八日ノ期限内ニ

之ヲ執行フ可カラス但シ第百三十五條ニ記
シタル如ク至急ノ場合ニ於テ八日ノ期限内
ニ其裁判執行ヲ別段言渡シタル時ハ格別ナ
リトス

又裁判役其裁判執行ヲ遲延スルニ付キ損害
アル可レト思量スルニ於テハ保證人ノ有無
ヲ問ハス故障ノ申述ニ管スルナク假ニ其
執行ヲ為スナラ言渡スヲ得可レ但シ其言渡
ハ裁判言渡書ニ附記ス可レ

第百五十六條 被告人代書師ヲ任セサル時ノ

裁判言渡書ハ裁判所ヨリ任シタル使吏又ハ
裁判所ヨリ特ニ定ナル被告人住所ノ裁判
役一人ノ任セシ使吏之ヲ送達ス可レ又原告
人ハ其言渡書ヲ得タル日ヨリ六月内ニ其言
渡ノ如ク執行フ可ク若レ然ラサル時ハ其言
渡書ヲ得タルヲナシト看做ス可レ

第百五十七條 被告人ノ代書師出席ヲ為サス
又ハ出席ヲ為スト雖モ論辯ヲ為サスレテ被
告人抗傳者トナリテ裁判言渡ヲ受ケタル時
ハ其言渡書ヲ代書師ニ送達シタル日ヨリハ

日内ニ非レハ其言渡ニ付キ故障ヲ述フルト
ヲ許サス

第百五十八條 被告人代書師ヲ任セシテ抗
傳者トナリ裁判ノ言渡ヲ受ケタル時ハ其裁
判執行ニ至ル迄ノ時間故障ヲ述フルトヲ許
ス可レ

第百五十九條 代書師ヲ任セサル被告人ノ動
産ヲ抵償トシテ差押ヘ之ヲ賣拂ヒ又ハ其被
告人ヲ禁錮シ又ハ以前ヨリノ禁錮セラレタ
ルヲ更ニ改メテ禁錮シ又ハ其不動産ノ一箇

又ハ數箇ヲ抵償トシテ差押ルトテ被告人ニ
報知シ又ハ被告人自カラ裁判ノ費用ヲ拂ヒ
又ハ被告人裁判ノ執行ヲ了知シタルトノ不
明ナル所為ヲナシタル時ハ其裁判言渡ヲ既
ニ執行ヲタルト看做ス可シ然レ前數條ニ記
シタル定記内ニ後數條ニ記スル法式ニ循ヒ
其裁判言渡ノ故障ヲ述フル時ハ其執行ヲ止
ム可シ但シ故障ヲ申述アルニ管セズ假ニ其
裁判言渡ノ如ク執行ヲ可キトテ言渡シタル
時ハ格別ナリトス

第百六十條 被告人ノ代書師出席セス又ハ出席スト雖モ論辯ヲ為サスレテ被告人抗傳者トナリ裁判言渡ヲ受ケタル時ハ其代書師ヨリ相手方ノ代書師ニ裁判所ヘノ願書ヲ送達シテ其故障ヲ述フ可シ

第百六十一條 其願書ニハ裁判言渡ニ付キ故障ヲ述フル憑據ヲ記ス可シ但シ其裁判言渡ノ前既ニ被告人ノ答辯書ヲ送達シ置キタル時ハ其答辯書ヲ故障ヲ述フル憑據トシテ用ヒントスルヲ記スルノミニテ足レリトス

此法式ニ背キタル故障申述ノ書ハ裁判ノ執行ヲ止ムルヲ得ス且原告人ノ代書師ハ被告人ノ代書師ニ答書ヲ送ルノミニテ其他訴訟ノ手續ナク其故障申述ノ書ヲ^{卻還スルヲ}得可シ

第百六十二條 被告人代書師ヲ任セスレテ抗傳者トナリ裁判言渡ヲ受ケタル時ハ裁判所ノ手續ヲ經サル書ヲ以テ故障ヲ述ヘ又ハ負債ヲ拂フ可キ要決ノ書財産ノ抵償又ハ禁錮ノ調書又ハ其他總テ裁判執行ヲ命スル書ニ

故障ノ旨趣ヲ附起シテ其故障ヲ述フルトヲ得可シ但シ故障ヲ述フル者ハ其後八日内ニ必ス代書師ヲ任シ其代書師ヲシテ故障ヲ述フル願書ヲ更ニ出サシム可ク若シ其八日ノ期限ヲ過シタル後ハ故障ヲ述フルトヲ許サス原告人別ニ裁判執行ノ命ヲ得スレテ其執行ヲ繼キ為ス可シ

被告人代書師ヲ任セシテ抗傳者トナリ裁判言渡ヲ受ケタル時原告人ノ代書師死去ニ又ハ其職務ヲ行フトヲ止メタルニ於テハ原

告人ヨリ更ニ代書師ヲ任シタルトヲ被告人ニ報知ス可シ但シ被告人ハ其送達ヲ得タル時ヨリ八日ノ期限内ニ代書師ヲ任シ其代書師ヲシテ故障ヲ述フル願書ヲ更ニ出サシム可シ

何レノ場合ニ於テモ被告人ノ代書師ヨリ裁判言渡ニ付キ一度故障ヲ述フルノ願書ヲ送達シタル後更ニ出シタル故障申述ノ憑據ヲ記スル書ハ其費用ヲ裁判費用中ニ加フ可カラス

第百六十三條 裁判所ノ書記局ニ簿冊ヲ設ケ
 置キ故障ヲ述フル者ノ代書師其簿冊ニ被告
 人ノ姓名並ニ己レノ姓名裁判言渡書及ヒ故
 障申述書ノ日附ト其申述ノ日附トヲ簡略ニ
 記ス可レ但シ其記レタル書ノ寫ヲ受取リタ
 ル時ニ非レハ其記録稅ヲ出スニ及ハス
 第百六十四條 原告人又ハ被告中一方ノ者抗
 傳者トナリテ言渡サレタル裁判ヲ其訴訟ニ
 管セサル者ニ對シ執行ハントスル時ハ書記
 局ノ簿冊ニ故障申述ノ書ヲ記レタルトナキ

旨ヲ証シタル書記官ノ請合書ヲ渡スコトヲ必
 要トス
 第百六十五條 一度差出シタル故障申述ノ書
 ヲ卻還スル言渡ニ付テハ更ニ故障ヲ申述ノ
 ルトヲ許サス

辻 士革 校

佛蘭西 法律書 訴訟法 一終

法律書讀法

又奇書

